



素材 / 鹿の骨、鹿角

2011年2月5日(土) — 3月13日(日)

於 主水書房



橋本雅也 | 裸のない種から

橋本雅也

殻のない種から

2011年2月5日(土) — 3月13日(日)

於 主水書房

午前 12時
午後 7時
期間中は土日祝のみの営業となります。

このたび主水書房では橋本雅也による展覧会

「殻のない種から」を開催致します。

実質上、橋本の初個展となる今展覧会で発表される作品は

鹿の角や骨から精巧に削りだされた花々です。

これまで近似する素材と手法で制作された作品はありましたが

それらの多くはピアスや髪留めといった装身具でした。

今回橋本はこれまでの作業を振り返り

自分が用いている角や骨といったかつて命であった物たちを

見つめ直すという動機の元、作品制作に取り組んできました。

およそ一年前に偶然にも橋本が手にする事になった一頭の鹿。

その鹿が残した骨は出来る限り使用されて

今回展示される花々として産まれ変わっています。

橋本が素材と対話を重ねてきた結果として静かに咲く花達。

この機会には是非沢山の方々にご覧頂ければ幸いです。

沢山の方々にご覧頂く為に営業日以外見学も随時行っております。

見学ご希望の方はお気軽に主水書房にお電話かメールにて事前にお申し込み下さいませ。

橋本雅也 プロフィール

1978年 岐阜県高山市生まれ 彫刻家

2000年、インドの旅の途上で一本の流木を手にしたことがきっかけとなり
簪を中心とした装身具の制作を始め、以後新たな素材との出会いを求めて世界各地を旅する。
帰国後、神奈川県に活動の拠点を置き、それまで収集した木や鉱物、角や動物の骨といった素材を使用し
装身具を製作していく。

その後程で様々な素材と向き合うこととなり、彫刻の技術はもとより、独自の素材との対話方法を確立していく
徐々に製作の活動は装身具の枠を超えてゆく。

2007年、無住の寺に生活と創作の場を移し、製作の重心を自身の作品に移す。
翌年、移住する際に落とした髪を題材にアントワープにて個展を開催。

他会場での関連企画

2月18日(金)から3月13日(日)の間
中之島・grafの3F showroomにて
橋本雅也の過去の作品を展示しております。
→ www.graf-d3.com

お問い合わせ

主水書房
〒590-0041 大阪府堺市堺区陵西通2-15
tel / 072-227-7980
info@mondebooks.com
www.mondebooks.com

会場での関連イベント

作家のお話と朗読会

日時 / 2月20日(日) 午後7時より
入場料 500円

作家・橋本雅也による作品制作にまつわるトークイベントです。
トークの後には橋本と主水書房が展示の内容に合わせてセレクト
した短編小説「生の挽」(ジャック・ロンドン作 柴田元幸訳
「火を燃す」スイッチャブリッキング刊より)の朗読を行います。

室礼・「春日／はるひ」

3月12日(土)、3月13日(日) 終日

展覧会最週末に率道家・片桐功敏のいけばな作品が
展示に加わります。
橋本雅也が制作した花と、片桐が生ける花によって
再構成された空間をご覧頂けます。



山を流れる一筋の沢が
鹿の血で赤く染まつた夜
私の中に一粒の種が落ちた
種はやがて芽を伸ばし
光で満たされると
いつせいに花を咲かせた

枯れない花

白い花が静かに咲いた。その美しさに、近づき触れようとする刹那、耳元で声がする。「この花は骨で出来ている。」思わずためらう指先と花の間に流れるのは、骨の持ち主であった獣の残像と微かな死の香りだ。しかしそれは見る者を拒む為のものではない。ただこの花には語るべき話があるのだ。暫し、僅かの距離を保ったまま。

今回の、橋本雅也による展覧会は一頭の鹿の死に端を発する。身を切るように冷たい冬山で起った生死の転換、流れた赤い血。山からの賜物の命は、陽の元に再び産まれる約束を交わし橋本の掌に落ちた。鹿の肉は食まれ、残された骨は洗い清められた後に、息が止まる程の緊張と共に彫り進められている。まるで漆黒の闇から逃れるかのように、執拗なまでに薄く削られた骨片からは、祈るように制作に打ち込む橋本の姿が垣間見える。やがてアトリエを照らす陽が、薄さの限りに達した骨を差した時、一頭の鹿は光を集めて灯るように、次々に花として産まれ変わった。

花が彫られたのは必然であったと言えるかもしれない。橋本がアトリエを構えるダム湖を見下ろす斜面に建つ寺の境内には、四季を通して絶える事無く花が咲くのだそうだ。実際私が彼を訪ねた折も、凍えるような寒空にも関わらず水仙の花が可愛らしく頭を垂れて出迎えてくれた。その場所は忘我の境地で命を彫るのにふさわしい静けさに包まれていた。制作にも目処がつき、落ち着きを取り戻したアトリエに初めて招き入れられた時に、当たり前の事に気付かされる光景があった。整頓された作業台の上に置かれたコップに岩煙草の艶やかな葉が数枚差されていた。そしてすぐ隣には真っ白な写し身の葉が一枚。そこには一年の製作期間を通して橋本と見つめ合いを続けてきた、ささやかな花達の命があった。花の命は短い。光の底のような白い小部屋で、花の移ろう速度に追いつくように彫る手を進め、一輪彫るたびに一輪が枯れる事実に、橋本はもう一つのつつましやかな死と浄化の巡りを感じていたのではなかろうか。

そんな気付きを胸に、指を近づける白い花はやはり美しい。一頭の鹿と手折られた実に沢山の花々、そしてそれらの命を見続けようと努めた一人の男。それぞれが繋がり、円が閉じた時にこの花は咲いた。だから枯れない。そして見る者を静かに覗き返してこう尋ねるかもしれない。「生きていますか?」と